

野菜を育てよう

岡崎市井田保育園（愛知県岡崎市）

[5歳児]

<活動前の様子>

毎年5歳児クラスが栽培する野菜の世話は保育者が中心となり、5歳児は、収穫する経験のみで終わっていた。どうしたら興味をもちながら世話をし、関心をもって野菜の生長の変化や不思議さに気付くことができるのかを考えて、本年度は土探しからの経験ができるように子どもたちに呼びかけていくことにした。

幼児の姿と保育者のかかわり

側溝の土運び→2回目の土運び→畝作り→苗植え

栄養のある土を作るため、畑の草を取り、腐葉土を友達と協力して運ぶ。そこで、土の重さを感じる体験をしたり、ミミズを発見したりしながら畑の土を作っていた。畝を作り、好きな野菜をグループで相談して決定し苗を植える。

事件発生！（キュウリの苗が折れる）

「先生、大変！」大変な血相で、毎日気にかけている水やり当番の子がとんで来る。

子ども「キュウリがちょん切れてるー」「どうしよう。大きくならないよー」

保育者「困ったね。どうしよう」子ども「でも、根っこはあるよ」

保育者「切れたのは、仕方ないからこのままにして育ててみようよ。でももし、枯れちゃったら諦めようね」「折れた上の方は、もしかして生き返るかもしれないから、水につけておくれ」



数日後 どうなったか心配している子どもたちに水に浸けておいたキュウリの茎を見せる。子どもたちは、「先生、これ根っこだ！」「生きとる！」「本当だ。生きとる。生きとる」「すごーい！すごーい！」と大喜び。

水に浸けておいた所から白い根が出てきている。それは子どもたちにも、不思議な現象と思えたようで、今度は大事に育てようということになる。



水のやりすぎ 大切にすするあまり水をやりすぎ苗がグタツとしている。

保育者「もしみんなが水やお茶を飲む時、お腹いっぱいになったら飲むこと止めてみましょう？ずっと飲み続けたらどうなる？」

子ども「お腹が痛くなる。病気になる」

保育者「そうだね。苗だって一緒だよ。飲みすぎるとお腹いたくなっちゃうんだよ」

子ども「お腹いっぱいってどれくらい？」

保育者「土が、乾いていたらお水ちょうだいって言っていると思うよ」



畑の草取り

子ども「先生、畑、草がいっぱいになってきたよ」保育者「草も生きているんだよ」

子ども「この土、おいしい栄養がいっぱいだからたくさん生えて大きくなっちゃうね」

保育者「根っこは、みんなのお口と一緒にだから、栄養をそこからいっぱい吸いあげているんだよ」

「草は、食いしん坊だから、苗よりたくさん栄養を取って食べてしまうんだよ」

子ども「草って、食いしん坊だね」「草ってすごーいね。でも、抜かれちゃうから可哀想だね」

保育者「でも草取りしないと、みんなの植えた野菜は大きくなれないよね」

子ども「そうだね。だから根っこから取るんだね」「先生、こんなに太い根っこだよ」

保育者「本当だ。すごーいね」

[考察] 水をやり過ぎても病気になり、畑には草も生え、作物が大きくなり実をつけるまでには、いろいろ困難なことがあることを体験できた。「それはどうしてなのか？」「どうしたらよいのか？」身近な大人に聞いたり、本や図鑑で調べたりする等、こちらが手をかけてあげなければいけないことがわかった。保育者も子どもと一緒に一つ一つ学んだことは貴重であった。

みどころ

自分たちで土作りから収穫までの栽培活動をして、野菜の生長を長期的に見守る中で、保育者も子どもたちも気付いたこと感じたことの伝え合いが活発にされています。それが栽培に必要な学びにもつながっていることが分かります。保育者が子どもと同じ目線にたち、子どもの思いを受け止めることで、「科学する心」が育まれていることが読み取れます。